

第六回「Far East 同時代セミナー」

(二〇〇六年七月十五日)

日本の英語教育はどうあるべきか —私の教育実践より—

中嶋嶺雄

国際教養大学理事長・学長
国際社会学者

【司会者】(北村文夫 元読売新聞ロンドン総局長)

お暑い中、多数の方々に集まりいただき、心からお礼を申し上げます。

ご案内のように今日のテーマは「グローバル化時代の英語教育」です。そのために、望み得る最高のゲスト・スピーカーをお迎えでき、とても幸せに思っています。中嶋嶺雄先生はご存知のように国際政治学、中国研究の有名な学者ですが、同時にグローバル化時代にふさわしい人材育成のために多大のご貢献をされています。

時間が大変に貴重ですので、先生の輝かしいご経歴と充実した学問的・業績は、皆様にお送りした案内状をご覧ください。早くして、早速お話をうかがうことにしたいと思います。

【中嶋嶺雄氏】(講師)



ご丁寧な紹介ありがとうございます。
どうぞございます。

本来は、中国問題か
国際関係のお話をすべ
きなかもしれません

けれども、小谷さんからのご要望により、英語教育の方に焦点を絞りながらお話をさせていただきます。新しく出来ました国際教養大学理事長兼学長ですので、この大学についても、ご紹介しつつお話しします。

まず私と小谷さんとのご縁ですが、私は一番のご厚誼を小谷さんから得ている一人でございます。

私の大変に兄事した碩学に中国学者の今

堀誠二さんという広島大学の先生がいっぱしゃり、いろんな意味で一緒にさせていただったり、ご教示をいただきました。

今堀さんは、広島で原爆体験をお持ちだということから、かつては原水禁運動にかなり関わっていらっしたんですけれども、やがて原水禁運動が持っているある種の欺瞞というか、偽善性に気づかれまして、むしろそこから少し距離を置かれたと思います。

しかし今堀先生の学生であられた小谷さんのお話を伺っていると、今堀先生の広島原爆体験は今日までいろんな意味を持っていらっしやる。今堀先生はお亡くなりなりました。今堀先生は、広島大学ご出身の小谷さんと私は今堀スクールというふうに言って

もいいかと思っています。そんなわけで本日こちらに伺った次第でございます。

英語教育と今の大学経営、あるいはグローバルゼーションなど、これら全ては別々ではありえないものです。お配りした資料の中から、皆さんと一緒に若干勉強させていただきながら、今日のテーマに迫ってみたいと思います。

私自身も実は学長自ら2つの授業を持っております。1つは Introduction to Global Studies というコマを春学期に、秋学期には Introduction to East Asian Studies(東アジア研究概論)を持ち、学生全員は私の授業を必ず取らなければいけないんです。

国際教養大学は、定員が130名という少

学生たちは初めから小部屋に囲い込まれてしまい、塾や予備校の偏差値でいっぺんそこに入ったら、それが自分に適しているか否かも見極めることが出来ずに、そのまま卒業させられてしまう。初めから、工学部社会工学エンジニアリング学科とかいう、そういう狭いところに入ってしまうのが日本の今の高等教育なんです。

そこに大きな問題があります。大学は出来るだけ自己発見のプロセスであり得るべきです。特に1、2年生のころは、そういうしっかりとした基盤教育をやるうということ、私どもは本格的な教養教育をやっています。

一昨日は、夜遅くまで私は大学にいました。

数精鋭のマイノリティー・エリートイズムをとっています。私の授業以外は、少数精鋭で各クラスは数名から多くて10数名です。授業を聞くまでには、英語の EAP (English for Academic Purposes) という英語の集中過程を終わらないとだめなんです。終わりました、例のアメリカ留学の際の TOEFL のスコアで530点をクリアしますと、次の基盤教育に進めます。

基盤教育と言うのは教養教育ですが、日本の大学からは、教養教育が制度的に消えてしまっています。教養学部は、東大駒場には形としては残っていますが、いわゆる教養教育は90年代初頭の大学設置基準の大綱化以来消えてしまったんですね。

世界的なバイオリニストの渡辺玲子さんの授業があったからです。私はスズキ・メソッドの第1期生ですけれども、同じくスズキ・メソッド出身の、有名な豊田耕兒さんが聴講に来てくれました。夕暮れ迫った秋田杉をバックにした教室で、ベートーベンのカルテットを、渡辺玲子さん自らが、少人数に弾きながら教えていました。そういう教育をやっております。

ここで英語教育についてお話しします。私は中教審の外国語専門部会主査として、いま小学校英語を推進する立場にあります。この構想は60%位しか詰めてありませんし、まだ中教審も中間報告の段階です。

これからパブリックコメントを経て、具体

的にどういう措置ができるかということを決めて、その上で、いよいよ導入する段階に入ります。しかし新聞記事等のコピーをお配りしているように、マスコミではみんな小学校から英語必修化って言っているんです。これは、マスコミの先走りでもあります。

話がそれましたが、教養教育がいかに消えてしまったかという話に戻ります。この間、私の友人で科学史の村上陽一郎さんとお話をしたんですが、特に東大の医学部がひどいと言うんですね。彼は東大駒場教養学部におりましたし、今CCU（国際基督教大学）にあります。

昔の東大は駒場の教養学部に理一・理二があって、よほど勉強しないと医学部に進めな

かった。ところが今は、理一と理二、理三があるから、受験の時に理三に合格してしまうともう全然勉強しないんだそうです。そして教養教育としての倫理学も、あるいは生物学もやらないでそのまま医学部に行ってしまう。そして医学部に行って臨床をやる段になると、患者は汚いと言うんですね。それが今の東大医学部の現実だそうです。

つまり、偏差値教育がいかに若者を歪めてしまったかということです。やっぱり専門は本当は大学院でやるべきであって、大学はUnder graduate(学士課程)教養教育、Liberal Artsをやちゃんと学ぶべきなんです。

そういうふうに思ひまして、私は、国際教養大学を作りました。そうしたら最近では教養

教育に伝統のあるICUのみならず上智、それから大分に出来た立命館アジア太平洋大学、それから早稲田の国際教養学部、来年は多摩大学その他が、国際教養という概念を導入するようになりまして、もう一回教養教育が復権する方向が出てきておりますので、私は大変喜んでいます。

もちろん旧制高校的なLiberal Artsも非常に重要ですが、やはりグローバル化時代にどういうLiberal Artsが必要かが迫られています。

では、グローバル化とは一体何かということとで、簡単に私の考えを申し上げさせていただきます。まずボーダーレス、国境が低くなりました。これはもう不可避的にそうならざ

るを得ない。つまり我々が食べている食材も80%から90%は外国から来るわけですね。それから人の移動もこれからは激しくなります。で、もう一つの特徴はITの発達によって、まさにsimultaneous(同時的)に世界が結び着いているんですね。どの世の中でも一挙に情報が入ります。ですからこのボーダーレス(borderless)とサイマルテニアス(simultaneous)という2つの特徴が、好き嫌いの問題ではなくて、これからのグローバル化の時代には避けられないんですね。

そこでコミュニケーションのツールとしての英語が今まで以上に必要になるわけですね。じゃあ英語さえ出来ればグローバル化に対応できるかと言えば違うんですね。それで

は世界が無機質になって、日本って一体何なのかということになるわけです。

そこで重要なのがアイデンティティなんですね。ところが日本人は、どうもアイデンティティの危機感が希薄ではないかと思えます。グローバリゼーションは、国家間のOrganization(組織化)ではなくて、まず日本人としてのアイデンティティが問われます。

日本人としてのアイデンティティを持つために、国際教養大学では新渡戸稲造の「武士道を全学必読文献としています。ただ、これは英語で書かれたわけですから、英語で読むようにしています。

そして大学在学中の留学期間に学長指定の本を必ず読むことになっているんです。大

学では全ての授業を英語でやっていますが、その感想は日本語で書かせます。

学長指定の必読文献をちょっと申し上げますと、斉藤茂吉の「万葉秀歌」岩波新書上下巻、それから中江兆民の「三酔人経綸問答」、ルース・ベネディクトの「菊と刀」、梅沢忠夫さんの「文明の生態史観」、清水幾太郎さんの「論文の書き方」。それから亡くなった私の友人でもあった高坂正堯さんの「文明が衰亡するとき」。

こういう必読文献を各自留学中に読んで、その感想をこれは日本語で書いて、学長が全部チェックするということになっております。これも日本人としてのアイデンティティを身につける一環なんです。

国際教養大学では、留学を義務付けていますので、それについてご説明しておきます。

留学に際しては、TOEFLが550点以上ないと留学させないことにしています。1学年分の単位を向こうで取ってくるわけですから、550以上の英語力がないと単位が取れないからです。

現在、日本の大学では、留学と言っても私学なんて見ると、留学期間に取得する単位数は、せいぜい8単位程度なんです。うちの場合、30単位を平均点以上で取って来ないと言っています。

1年分を外国でそのままやるわけですから、事前の大学間交流の折衝が重要なんです。非常に大変なんです。一人一人について、

留学先に同じようなカリキュラムがあるかどうかをマッチングいたします。ですからカリキュラムも、国際的な通用性を持っていて、コード番号も、100番台は基礎科目とか、応用科目は400番台という風になっています。そういう形で留学を義務付けているわけです。

しかし英語で全てをやるというのは、何もぺらぺら英語ができるというだけでなく、中身が大事なんです。そういう点からも、私たちの大学は非常に学生の質も高いと言われています。昨日も日経新聞と財団法人貿易研修センターと国際教養大学主催のEntrepreneurship(起業家)のセミナーがありまして、外国からもパネリストがかなりたく

さん来ていまして大変人気だったんですが、
そこでも皆さんからお褒めをいただきました。
た。

お褒めの言葉はいただいています、学長
として見てますと、まだ問題は残っていると
感じるがあります。

それは英語の質の問題なんです、確かに
うちの学生は、TOEFL的な英語は出来る
んです。学生はTOEFLで550点ないと
留学出来ませんし、卒業時には600点以上
が目標です。600点ないと仕事で英語は使
えませんよね。550点ないと外国行っても
留学して単位はとれないんです。ですから先
ほど言ったように、日本での平均は、トップ
クラスの大学でもせいぜい平均で12単位で

FLやTOEICには出てこないんですね。
この資料は、中国がいつ拒否権を使ったか
というものです。これを授業でやったんです。
中国は意外と拒否権を使っていないんです
ね。過去に5回しかありません。50年代な
んて冷戦時代ですからアメリカとソ連なん
てしょっちゅう拒否権行使していたんです。
何かあるとすぐソ連も拒否権を使っていま
した。こういうのに比べますと、中国は過去
5回しか拒否権を行使していません。したが
って今回の北朝鮮のことで拒否権を行使す
るかどうかというところで、こういう過去の
データからヒントが見えてきますね。中国が
拒否権を行使した第1回は、なんと1955
年の12月。これはAdmission of New Members

ですね。東大とか慶應、早稲田でせいぜい8單
位から12単位、多い人で東工大あたりで理
工系で取れて18単位ぐらい、広島大は留学
に積極的で、やはり18単位ぐらいですか。
うちでは人文社会系で30単位取るのですか
ら、皆よく出来るんです。TOEFL的な英
語は私よりもはるかに出来ます。

しかし問題はその英語力をいかに活用す
るかです。北朝鮮の問題がホットですので、
私の授業で、それを一昨日やったときにそれ
を感じたんですね。

その授業内容をかいつまんでお話ししま
す、皆さんにお配りした資料のUnited
NationsのSecurity Council、安全保障理事會
ですね。Security Councilという言葉はTOE

ですから新規加盟国の問題ですね。それでな
ぜ拒否権を使ったかと言うと、Mongolia(モ
ンゴル)っていう言葉がけしからんというの
で拒否権を使った。この時の中国はPublic of
China(中華民国)、今の中華人民共和国では
ありません。なぜ当時の蒋介石政権が反対し
たかという、蒋介石政権はモンゴルという
のは自分の国だと思っているから、独立され
ては困るわけですね。そういう意味で拒否権
を使いました。第2回目は72年で、台湾が
追放され代わりに国連加入して、People's
Republic of China(中華人民共和国)が中近東
問題で拒否権を使っています。そして3回目
もですね、中国と当時のソ連が一緒に中近東
問題で拒否権を使っているのは、やはりアメ

リカの政策と中東政策において対立していたからなんですね。そして4回目は97年の1月で、Central America: efforts toward peace についてです。中米が平和へ努力することに対してなぜ中国が拒否権を使ったのか。これはグアテマラ問題なんです。グアテマラというのは台湾と国交を持っている中南米諸国の数少ない国です。中華人民共和国は初めて、自ら単独で、こういう形で拒否権を使ったんですね。その次の5回目は、The situation in the former Yugoslav Republic of Macedonia。旧ユーゴのマケドニアという小さな国が、問題になっていきますね。拒否権を行使したのは、このときマケドニアが台湾の、つまり Republic of China の国連参加に票を入れているからな

んですね。総会では台湾が国連再加入することに、いつも賛成票が10数票から20票はあるんですね。そのひとつにマケドニアがあったもんだから中国は拒否権を行使したんです。と言うことはですね、過去における今の中国の拒否権は、要は50年代の国連加盟直後を除くそうですね、まさに全て台湾問題が背景にあるんです。この資料にはそのことが記されています。中国は台湾と国交を持っている国々の有利になることは絶対しないという、実に、李登輝さんが日本に来ることさえも中国は許さないというのと同じようなものですね、それと同じようなコンテキスト(context)が働いている。

そうすると、今回北朝鮮のことで世界が見

ている前で、果たして中国は拒否権を行使するだろうか。なかなかしにくいと思いますね。しかも拒否権を行使した場合に、中国は全世界が見ている中で国際的に孤立します。ですから中国としては、なんとかロシアを誘って、

是非皆様と一緒にウォッチしたいと思います。その場合に今日お配りしたような資料はお役に立つかと思います。

単独の拒否権行使を避けようとする動きが一つ、もうひとつは、拒否権を行使せずに議長声明で止めておこうということですね。ですから、議長声明で止められるかどうか、いま中国は外務大臣が必死になって多数派工作をやっています。ただこの問題を私が見るところ、今回は日本外交が久々にヒットというか、国連の安保理の場で、少なくともかなりファクターになったということは評価できると思いますね。これが今後どうなるか。

さてそれを私の、授業でやったんです。そうすると、問題が出てきたんですね。たしかに全国的に今受験界では奇跡が起こっていると言って、東大、京大の次が教養大、東北ではもちろん東北大学より入試の難易度では難しいことになっていますし、ですからそういう意味では有難いんですけれども、そういうTOEFL(Test of English as Foreign Language)的な英語能力だけでいいかということになるんですね。うちはTOEFLを入試にも入学後のクラス分けにも完全に使っていますから、学生はTOEFLは出来るん

ですね。そこでやっぱり中身ということになる。そうしますと私の授業でも、例えばその sanctions=制裁という言葉がでてきますよね。そんなに英語が出来る、TOEFLでは恐らく私より出来るような学生でも、この単語が出てこないんです。それから六者協議=Six parties talk、中学の英語で分かるはずのことがパッと出てこないんですよ。普通の大学教育、高等教育の英語では、シェークスピアのものも読むかもしれない、フォークナーのものも読むかもしれない。けれども現実社会で、グローバルの時代に、日本人が対応すべき問題についての英語での授業を、EAPと言って学術目的の英語—English for Academic Purposes—を、聞き取れるような英語力を持

お世話になりました。それから英語で有名な小川芳郎先生にも。

こういう伝統があり、そういう英語界の權威とか研究者、辞書を作っている人とかいっぱいいるんですけど、東京外大では私の言ったような英語教育ができないんですね。

英語の先生は、こういうこと言っているのか—まっ、もういいんでしょうね、外国人が来てパーティやるとみんな帰っちゃうんです。英語の先生が出てこない。私自身は、大学受験はフランス語でしたし、大学では中国語をやりましたし、いろいろやりました。受験英語ではなく、英語はともかく通じればいいと思っていますから。人が来ても、平気で話すわけです。ところが、英語の權威はい

てるようにならないといけない。

それには教科書をどうするか。これから私も検討課題に乗せようかと思っています。わが国のこれまでの英語教育は、根本的に改めなければならぬと思うんですが、なかなかこれが抵抗があります。私は東京外大の学長のときに、語学の殿堂と言われる東京外大の英語をいかに改めるか、1年間に五十何回ぐらい会議をしました。しかし結局何も変わリませんでしたね。つまり英語の先生が一番抵抗するのです。それから東京外大には岩崎民平をはじめ大変な英語学の權威がいましたし、私も岩崎先生にはお世話になりました。私の学生の頃は学長でしたし、私は学生代表で、学友会の委員長でしたから、いろいろと

い英語をきれいに使わなければならないと思うせいなんでしょうか。ずっとそういう時代が続きました。それが日本の英語学界。最近は、若い人を中心にかなり違ってきます。

今回の小学校英語の導入についても、やはり英語学者には非常に反対論が多いですね。それは従来の英語教育、それに絡む膨大ないろいろな利権というか、業界の裾野があるんですね。そういうものが根本的に崩れていくかもしれないという不安があるんじゃないでしょうか。それから皆さんご存知の鳥飼玖美子さん(2006年4月24日朝日新聞「今日の論点」『小学校から英語を必須?』)、この方も、私と文部科学省の英語の初期の懇談会で一緒でしたし、それから慶應の天津由紀

雄さん(2006年5月2日読売新聞「論陣論客」『小学校の英語必修化』)、日本英語の学会の方なんです、こういう方からの反対が非常に多いですね。

それから、保守派の論客も意外に反対が多いんですよ。藤原正彦さんとか、それから、中国問題などではかなり私と意見の近い中西輝正氏とか。私が言おうとする英語教育を、ちゃんと文部科学省の中間報告でも読んで下されば、そんなに反対にはならないと思うのですが、一般論としてはかなり反対が多いんですよ。

で、まあそういうことなんですが、英語教育には二つの問題がからんできます。一つは言うまでもなくグローバル化。それともうひ

だけどそのような日本人は実に数が少ないです。日本の若者でも国連職員になりたいとか、希望はいっぱい出てくるんですね。だけど実際には、なかなかないんですね。国連の分担金の割合も多いのに、日本人が一番少ないわけですから。

それはひとつにはですね、英語力だと思います。もうひとつはですね、日本のこれまでの官僚機構に問題があるんです。日本はトップの人は、たとえば東大法学部を出てそのまま役所に入るでしょ。それから、中には岡崎久彦さんのように——これは名誉だから言ってもいいと思うんだけど——東大法学部中退で外交官になるでしょ、それは名誉ですよ。だけど今の国際社会では通用しないんです。

とつは、これは意見がわかれると思うのですが、全ての人が英語を使わなくてもいいじゃないかという意見が、必ずあるんですね。

2000年に始まった文部科学省の英語教育の指導方法改善に関する懇談会、これはちょうど中曽根文部大臣のときでした。そのときはですね、一年間やって必ず議論が出ました。それをどういう風にまとめたかというと、国際社会で活躍するような人材の英語力と、一般国民の英語力とに分けたんですね。

で、国際社会で活躍する人たちの英語、これはもう絶対必要ですね。国際教養大学のトップ諮問会議の座長をやっていたいている明石康さんがいらっしやいます。国連の事務次長を務めた立派な方だと思うんですよ。

少なくともPhDを取っていないと。あるいはプロフェッサーの肩書きがないと、あるいは最低限度専門職でも、修士の学位を持っていないと通用しないんですよ。諸外国はみなPhD持っていますから、ほとんどの人は。そういうことも考えなければならぬ。それは日本の高等教育のあり方を根本的に変えなければならぬ。日本的なエリート主義と、日本的な伝統的な官僚制度が、国際社会にマッチしていないんです。ですから、そういうことに耐えうるような人材を必要とすると言うことで国際教養大学ができたのです。

この間こういう例がありました。私は長い間、アジア太平洋大学交流機構(University Mobility in Asia and the Pacific, UMAP)の国際

事務総長という役割を負わされていてまして、これは留学生の交流ですね。具体的には単位Credis Transferです。ヨーロッパでのエラスムス計画で、しょっちゅう大学生が交流して単位を交換する。そんなこともあって、ASEM (Asia-Europe Meeting)、日本政府もコミットしてるアジア欧州会議での会議がシンガポールでありまして、私は基調報告を頼まれて、それなりの準備をして午前中のセッションでやりました。午前中は私の基調報告のあと、一般の討論になりました。日本から30人くらい大学の先生や文部科学省のお役人などが来ているんですけど、私の基調報告に続いて、フロアのディスカッションで発言してくればいいのに、いくら僕が目配せし

は、大学受験者の0・25%です。2・5%じゃないんです。つまり50万人中、1250人なんです。つまりTOEFLで600点でいうと、英語で仕事ができるような英語力ですよね。留年したり進学したりする人もいますから、50万人を仮に40万人としても、39万9千人は約10年間英語を学んできたのに、まったくその英語は使えない英語であるか、そのまま錆び付いていく英語であるんですね。こういう英語教育をずーっと日本はやってきたわけですね、この知的損失というのは大変なものです。

もうひとつはですね、一般の普通国民の英語力なんですけれども、これについては、今の論争の中に一般国民はそんな英語必要な

ても、誰もしゃべらないんです。30名くらいいました、アジアの人どうでしょう？ それらの人の英語は、文法だって発音だっていい加減だと思うけど、どんどん手を揚げて、韓国、台湾、中国、シンガポール、マレーシアの人たちが、どんどんしゃべるんですね。やっぱりそういう国際社会で活躍できる人材の英語力を徹底的に高めなければいけない。

統計によりますと、わが国では毎年50万人前後が大学を卒業するんです。そのうちですね——大学受験者全員がTOEFL受けるわけではないんですけど——TOEFL協議会のデータをそのまま紹介しますと、TOEFLのスコアが600点取れてる人

いという意見があるんですね。私はそうは思わないんですね。まずこれからはITの時代ですから、普通の人でも、やっぱり英語でアクセスできるとできないのでは、絶対情報量が違います。

それからおそらく日本社会もあちこちら、まさにそういう意味ではグローバル化していますから、いろんな人が入ってくる。これで諸外国はどんどん、特にアジアは、街角に行ってもみな英語ができるようになりますよね。日本人はそれができないということではないのかということ。ですから英語指導方法改善のための懇談会では、その二つの座標軸を設定して、区別して議論しました。だから侃々諤々の議論がひとつの方向にま

とまったんですね。

それを受けて文科省は仕事で英語が使える日本人の養成プロジェクトを次々に掲げてきました。国際教養大学も設立早々に仕事で英語が使えるプロジェクトのモデル校に選ばれて、予算をつけていただいて、学内と町の中にサテライトを作りました。C-L (Center for Independent Language Learning) という、言わばセルフ・アクセス・センター(Self Access Center)でして、自分で英語の学習が十分できるようなこともやります。学生と、同時に市民も参加しています。

ですから国際教養大学では全ての授業が英語なんですけども、自分でもってCNNを聞きたければ、そこで何回でも聞くことが出

て、だめになる国語力では、そもそもその国語力がだめなんです。それは英語をやったから国語がだめになるという二律背反ではないんですね。

まだきちんとした実験結果は出ていないとは思いますが、すでに実験校とか特区では、やっぱり英語ができる学生は国語もできる。成田空港に近い成田小学校もそうなんですが、かなり英語をやってきていますが、国語の力が非常にあるんですね。英語もできる。だからこれはむしろ、英語を小学校からやるからという問題であるよりは、日本人の今の言語感覚というか国語力が相対的に弱くなっていることではないかと思うんです。

僕はその一環で、テレビの俗悪番組がい

来るんです。それに映画とかDVDとかビデオもありますから、それを自分で何回でも聞くんですね。そうしますとね、こういったことを3ヶ月徹底的にやった学生は、さっき言ったような問題を英語でディスカッションできるようになります。

CNNは今はどこでも、ホテルに泊まったときにも聞けますよね。だけどそういう英語教育を他の大学ではやっていないものだから、三九万九千人はCNNを聞いても全く解らないんですね。

それからもうひとつの議論はですね、国語力との関係ですね。これは必ず出る意見なんですよ。ところがですね、私の経験からも言えますが、外国語をひとつやったからとい

に悪いかを書きまして怒られましたけど、それを含めてですね、日本人の言葉に対する乱れというか、言語感覚が弱体化しているところにおしる問題がある。小学校で英語をやったら国語だめになるということはないと考えています。

それからもうひとつ、英語教育の環境自体がグローバルになっているのに、皆さんが中学校で、あるいは旧制高校とか旧制中学校でやった英語の時間よりも今は少ないです。中学校では平均すると一週間に2・5時間です。これは文科省がデータを取っています。皆さん同世代で、週に4、5時間は英語がありましたよね。そして覚える語彙がいまは900、我々の頃は少なくとも中学でも1500以

上ありました。高等学校で4000ぐらいありました。今900なんです。これはゆとり教育のおしろ弊害と言ってもいいかもしれません。

そのほかにどうして英語の時間がそんなに少なくなったかと言うと、クラブ活動とか部活など、それからいろいろな他の課外活動に取られちゃうんですね。それで果たしていいのかっていう問題があるんです。少なくとも中学では週4時間にしなければなりません。もし中学で、どうしてもできないなら、その分を小学校5年、6年からやるべきではないかと僕は思うんです。

やるからには、正課、つまり教科としてやるほうがいいというのが私の意見で、そこはきていますので、そういう形で特別講師(非常勤)として導入することもできる。

それからですね、現に英語がほとんどの小学校で実質的には行われています。もう90%以上の学校で行われているそうです。それは総合的学習の時間というものがあってそこで教えているんです。総合的学習は3、4年生からで、その時間の中で、「国際理解教育」として英語を週1時間くらいものをするところが増えてきているんですね。しかし全体的に見ると、小学校で英語を今やっているのは年間にして20時間か30時間程度です。これだといわば英語のお遊びにしかならないということがあります。

そこでもうひとつ、私はEarly Educationと

まだ中教審でもまとっていません。教科としてというのはどういうことかと言いますと、教科書ができ、それなりの英語の先生を必要とします。

地方でもかなり英語ができる人がいるでしょう。小学校の英語くらい教えられる人、あるいは商社に長くいた人なんかはまさにそれができる。特派員などのジャーナリストだっているわけですからね、そういう方に英語の先生になっていただければいいわけです。いま地域によっては非常に成功しているところもあるように、これからは地方の時代ですから、地方自治体がそういう人達を高齡化社会の活性化のためにも活用すればいいのです。だんだん文科省もその辺はゆるくなって

いうか、早期教育について考えていて、これも議論が分かれるもので、皆さんのご意見も伺いたいと思うのです。

早期教育の肯定的な面を申し上げますと、やっぱり言語の認知力っていうのは、音楽とも非常に相関性があって、九つまでなんですね。自分が鈴木鎮一先生の創った松本音楽院の第一期生ですから、若干身びいきかもしれませんが、これは脳科学の発達によって、国際的にも証明されてきています。

この間、スズキ・メソードの豊田耕児・才能教育研究会会長とドイツにご一緒しました。ドイツは非常に脳科学が発達しているんですが、やっぱり幼児のうちに、頭脳の柔軟なうちに自然に入るようにすると大きな成

果があることが分かって来ています。

スズキ・メソードについては、わが国では文科省がまったく取り入れていませんので、いわば公教育からは排除されていますが、アメリカでは非常に多くの大学がスズキ・メソードを取り入れています。

コーネル大学のイサカ・カレッジでは、スズキ・インスティテュートというミュージック・スクールがあるんです。アメリカは20万人前後の人達が、Early Education（早期教育）にスズキ・メソードを取り入れています。ですからアイザック・スターンが最後に演奏した「ミュージック・オブ・ザ・ハート」（注：イーストハーレムで、子どもたちにバイオリンを教えたロベルタ・ガスバーリの実話をもとにした映画の題名。アイザック・スターンは原案ドキュメンタリー『ス

が、ご自身は音楽のほうに行くつもりはなかったんです。鈴木政吉さんの長男として、名古屋商業学校しか出てないんですよ。それが18歳のころミッシャ・ヘルマンのアペマリアを聞いて心を動かされ、徳川義親さんにスポンサーになっていただいたりしてドイツに行ったんです。ドイツでモーツアルトのクラリネット五重奏を聴いて感動し、ベルリン・ホッホシューレ（高等音楽学校）のカール・クリングラー教授に学んだりしています。日本で一介の青年であった鈴木さんが、たまにアインシュタインなんかと仲良くなっ

て大きな影響を受けて、そういう実績を作って日本に帰ってくるんです。アインシュタインもバイオリンを弾きますからね。そして日

モール・ワンダーズ』で描かれた1993年の『アイドルフェスト／ヴァイオリンの祭典（ロベルタの提案により、教え子の子どもたちと世界的バイオリニストが共演する祭典）』で演奏している）、これなんかもスズキ・メソードでして、そういう経験からすると、やっぱり”つ”のつくうちに始めないといけないんですね。九つであって10（歳）ではだめなんですね。

私は実は、松本音楽院の第1期生なので、その体験からお話します。今から考えるとまさに木造の二階家を使った私塾ですけども、そこに松本音楽院を鈴木先生が中心になって作ったのが昭和21年、終戦の翌年ですね。

鈴木鎮一さん自身は、日本で始めて近代的なバイオリンメーカーとして量産をした、名古屋の鈴木バイオリン工場の御曹司でした

本に帰ってきて3人の兄弟と一緒に初めてカルテットをやる。それが日本最初の弦楽四重奏団になります。

だけど官学である東京音楽学校（現東京芸大）とかを全く経由していないんです。ですから音楽アカデミズムの世界では、鈴木さんを排除しようとする動きがありました。けど実際には、まず江藤俊哉氏を幼児教育として預かりました。その次は豊田耕兒さんですよ。それから諏訪根自子とか、皆さん懐かしいような人たちがみんな鈴木門下から出ています。鈴木秀太郎さんもそうです。最近では、渡辺玲子さんとか竹澤恭子さんとかそういう人たちが、最近ロン・ティボー国際音楽コンクールで最年少優勝した山田晃子

さんとかがスズキ・メソードの出身なんです。

その鈴木先生が松本音楽院を作ったのは昭和21年、私はその昭和21年度の1月に母親に連れられて雪の日の松本で鈴木先生の門戸を叩いたんです。

非常に感動的な場面を上げますと、昔の旧制松本高等学校（後の信州大学）の講堂で昭和22年か23年、ほんとにまだ戦後の混乱の中で、松本交響楽団を鈴木先生がきちんと燕尾服を着て指揮して、豊田耕兒さんがモーツアルトのバイオリン・コンチェルト5番を弾いたんです。

そういう時代に松本に育ったんですが、私は10歳でしたから、もう遅いんですね。その頃4、5歳の人はみんなすごく上手になっ

スズキ・メソードで教育を受けたからといって、皆が皆プロとして、音楽家として、活躍できるわけでは決していないのです

私はスズキ・メソードの社団法人才能教育研究会で常務理事をこの間までやっていました。武道館で3000人の子どもたちが集まるグラランド・コンサートの大会委員長もずっとやっていたんですが、今回ようやく外れることができます、ホッとほしているんです。それで、スズキ・メソードにいろいろ問題点があることも承知しています。つまりそれは、どこで才能を見極めるかという、親の判断、子ども自身の判断がすごく重要で、それが難しいのです。見極められないで、長くレッスンしていると、自分もやがてコンクールに出

て。九つを過ぎると他のことに関心が出てくるし、学校でも生徒会だとかいろいろやらされて、陸上競技の選手もやったり絵も描いたりしていたんです。

第1期生には4歳、5、6歳ぐらいの人は10人前後いたんですが、私以外は全部プロになりました。そのころ豊田耕兒さんとか小林健次さんをしょっちゅう横で見えていて、このお二人が演奏するバッハのドッペル・コンチェルト（二つのヴァイオリンのための協奏曲）が実に素晴らしかったのを聴いていましたから、自分はとても音楽で身を立てようなんて全く思わなかったし、そんなことは考えられないほど豊田耕兒さんなんか天才だったです。

てスターになれるんじゃないかと思うんですが、それが間違いなんです。それは偏差値教育の誤りと共通するところがあるんです。

ですから才能は、鈴木先生が言ったように、育て方ひとつなんです。いい環境で、早くいい先生について繰り返し練習し、耳から聴いて憶えて暗記する、これがスズキ・メソードの方法論です。これをやりますと、どんな人でもモーツアルトのバイオリン・コンチェルトが弾けるようになるんです。

だけでも、それから本当にプロとして、音楽家として、残れる人は、そういう人達の中で1000人に一人くらいなんです。だから渡辺玲子さんもずっと演奏活動をしてい

て、この間もサントリーホールでショスタコービッチのバイオリン・コンチェルトをオーケストラをバックにやってみましたけども、彼女も国際教養大学の特任助教授になって、ほっとされているんですね。やっぱり舞台を張って演奏活動一本で生き抜くというのは、次々に新人も出てきますし、大変なことですね、音楽の世界も。しかもその割合には収入も厳しいです。

サントリーホールを一杯にするってことは、そう簡単ではない。にもかかわらず、どのくらいギャラをくれるかって私は知ってますけれど、やっぱり厳しいですよ。そのため、音楽事務所にいろいろ気を使ったりしている。音楽事務所がまたコントロール

にヒアリングがどうしてもできないということになってしまったのです。

そんなことを考えると、小学校の英語教育についても、まだまだ検討しなければいけない課題がたくさんあります。皆様方にもいろいろご批判を頂きたいと思っております。

最後に、文春新書から最近、私の編著『歴史の嘘を見破る―日中近現代史の争点35』というのが出ていますので、もしご興味のある方は、ご一読くださいますようよろしくお願い致します。それでは以上を持ちまして終わりとさせていただきます。

【北村文夫】(司会)

講演はここでひとまず終わり、ご参加のか

しますからね。事務所側でちょっと気に入らなくなったりすると意地悪したり、そういう世界があるんですね。

ですから、その中でプロとなって活躍することができるとかは、才能ではなく、才能の他にもうひとつ、才能はタレントですけども、ギフトというか天分が必要です。才能と天分は違うんですね。

私はEarly Education(早期教育)には賛成ですけれど、それは余程注意をして取り組まなければいけない。だから英語教育も、私はできるだけ文法とかではなく、耳から入るほうがいいと思うんですね。

今までは耳から入るような英語教育をやってきましたから、さっき言ったよう

たがたからのご意見やご質問を承り、自由な意見交換をさせていただきます。

【浅沼(小谷)瑞穂子】(当セミナー主宰者)

今日のセミナーは女性のほうが多いというところに、非常に特異性があると思っております。女性は、子育ての過程で、子どもの英語教育や国際化へ向けての教育など、現場で苦勞した体験がございますから、皆さんどうぞ、ご自分の体験なさったいろんな悩み、それにどう対応すればいいか、そういうご質問をお願い致します。

【中嶋】今日は私のゼミの林みどりさんのお母様がいらしています。お嬢さんは今国会図書館にいらして、インドにも留学されています。

【林のぶ子】（元婦人国際平和自由連盟副会長）

娘が大学院の時、先生は主任教授でいらしてお世話になりました、ありがとうございます。娘はヒンディー語を最初いたしました。インドでは英語で大学院は授業を受けていたようです。英語に関しては、うちは小学校の時は何もしておりませんで、中学に入りましたとき、NHKの基礎英語ってございますね、あのテキストを買ってやっておりまして。テキストは本屋さんが届けてくれていたんですが、続基礎英語になったらテキストが基礎英語の半分くらいに減ったと言っております。基礎英語は朝6時半からございましたけど、娘を起こしてやるのではなく自分でやらなければ駄目だと、起こさな

文コンテストに英語で書いたものが金賞をいただきました。

英語教育については、長岡でしたかしら、その小学校では7、8年前から英語を取り入れていることを耳にしました。外国人の先生を講師にお招きして、ABCという教え方ではなくて、日常生活で必要な英語をお芝居のようにして教えていると聞きました。これからの英語教育は、今の英語の先生ですとちよつと英語力が足りないでしょうか、そういう点で小学校からもし英語をやった場合、先生の問題にどのくらいかけられるかというところが大事なあとと思っております。

【中嶋】最後のことは非常に大事なところで、私も中教審の最終報告のところで、必ずそれ

いでいました。でも最初の一週間くらいは、聞いてるかなあと、階段の下で気にしておりましたが、やってるようでした。そういう程度で英語は進めておりました。まあ英語の力は、先生はご存知でございますのでお恥ずかしいです。

もう一人の子どもも仕事を持っておりますが、孫がおりまして、お勉強は小学校のころから英語だけ習いに行かせておりました。今は女子学院に行っておりますが、英語もできましたして留学も致しました。アメリカで数学とかアメリカ史で学年で一番を頂いたと言っていました。これからの子どもは案外そういう点で期待もできるのかなと思っております。今高校2年ですが、この間旺文社の作

入れようと思っています。2、3日前の新聞に出ていたように教員の免許更新制ですね。もうひとつは教職大学院の設置。

今、小中学校も高等学校も、教員になるための試験科目に、英語の教師以外は英語の試験がないんですよ。ですから当然小学校、中学校も、教員採用試験に英語を入れる、それは非常に重要な問題です。教える人達のレベルが大事で、その辺を詰めなければいけないし、それに対する予算も必要ですね。余程国家の戦略として考えないといけない。

今のお話の中で、もうひとつ付け加えると、日本のことをもうちょつと英語で表現できるような授業が非常に大事ですね。それはほとんど今まではやっていないんですね。日本

人が日本をどういう風に表現するかっていうのは非常に大事だと思います。

さっき国語力という話が出ましたけれど、たとえば「ジェスチャー」という言葉をとってみても、今の子どもは「身振り手振り」という立派な日本語はほとんど使わないんじゃないでしょうか。だから逆に、国語力を生かすためにも、「ジェスチャー」という英語とともに、「身振り手振り」もきちんと教えるような英語教育ができるといいんですがね。

【今井久夫】（元産経新聞論説委員）

先ほどの結論部分で、耳から入る英語は日本人は弱いという指摘がありました。が、私もそう思います。それからもうひとつ、シン

ものはそれなりにですね、世界における日本人の存在感というものがあるのではないのでしょうか。

日本人はしゃべらないけれども、分からないでしゃべらないではなくて、分かっているけれどもしゃべらない。そういう意味で、一種の畏敬の念というものがやはりあるんじゃないありませんか。

東南アジアは、そう言うては申し訳ないけれども、東南アジアの連中はですね、軽薄そのものです。ですからね、ああいう連中の勢いに押されることなく、幕末以来百年以上の歴史のある、本当に日本人としての英語の学び方というものが今問われているのだと思いますね。

ガポールで先生のお出になった会議で、会場から肝心の日本人からの発言がなくて、ぺらぺらひどい英語をしゃべる人からやたら質問してくるという傾向があるということでございますよね。全く想像に難くないんですけれど、どうでしょう、明治、明治どころか、幕末から日本人の英語勉強というものは文字ですよ。ですから耳から入る英語はだめであったかもしれないけれども、目から入った英語、これはですね、百年からの歴史でもって、日本人の中に染み込んでいると思うんですね。

まあTOEFLの0.25%かどうか知りませんが、しゃべるほうは日本人はだめですけれど、目から入った英語の知識という

【中嶋】ご指摘のように目から入る英語、これの重要性、まさに教養教育がそうでしたね。昔の一高の英語教育は、まさに目から入った英語でした。これを否定することはできませんが、にもかかわらず、目から入った英語がそこまでできる人が、自分の意見を言えないっていうんじゃないんです。そのところでですね。それだけのものを持っていて、ただ黙っていると日本人は存在感がない、そこをどういう風に発信力をつけていくかですね。

その点から言いますと、私は東京外大の学長をやったときに、一番時間をかけてやったことは大学の歴史全4巻を作ったことです。東京外国語大学は明治6年に出来ていな

ら、火災とか震災、戦災で、大学の歴史がなくなってしまうていたんです。

いろいろ調べてみて、明治6年には当時の南校から出てきた独逸学教場と外務省の語学所と、そして開成学校の語学部と一緒にあって東京外国語学校ができた。そのときには藩士の子息たちが皆入ってきて、実は岡倉天心、それから新渡戸稲造、内村鑑三、それから例の柔道の嘉納治五郎などもみんな同級生なんです。やがて新渡戸稲造が東京英語学校に移って、それがやがて一高になっていくんですね。天心はかなり外語に残りました。天心が外語に入ったのは10歳のときです。稲造が入ったのは11歳。みんなその位ですね。当時は年齢制限がなかったんですね。そ

青山学院の初等部というのがございまして、わたしはそこに40年勤めておりました。ただ英語は、私自身は旧制の中学で、最後は軍隊まで行かされたものですから、もう全く英語はだめなんです。

私が青山学院に参りましたのは昭和27年、1952年ですね。戦後すぐ英語教育は始めておりました。その当時はネイティブがミッショナリーとしておりましたから、ネイティブが5、6年に英語を教えておりました。今から16年前にリタイアいたしました。私がおりましたときはネイティブの方もおられる、それから日本の方で英語を教える人もいました。

最近、私は初等部に参りましてね、いった

れらの人達が入って、新渡戸稲造もクラーク先生を慕って札幌農学校に行ってからほとんど知らない。その前史がありまして、そこでかなり外国人に英語を英語で学んでいる。その蓄積があったんですね。それはある意味では目から入った英語かもしれません。しかし外国人から英語は英語で学んできますから、そういうことを考えますと、あの時期の人達というのは、今のようにテレビだとかビデオだとかない時代に実によくやったと思いますねえ。そこをなんとか今の若者たちが、少なくとも自分たちの意見をきちんとした英語で書いたり話したりできるようにさせたい。

【伊藤朗】(元青山学院初等部長)

英語教育はどのようにされているのかと思っ行って、今度びっくりして帰ってきたんです。というのは、今は教育機器を入れているわけですよ。だけどね、こちらは私学ですからできるんですよ。文部科学省がどうしてもやっているように小学校5年生からやるというのは、これはね、大変なことだなあとありますよ。もちろん賛成ですよ、賛成ですけれども、やるからには余程腰を入れてやらないと。

それからもうひとつですね、もっと社会教育をやるべきではないかと思えます。なぜかと言いますと、いま社会教育に携わっていません、ユートレック(UTREK)という団体と二十年前から関わっているんです。今度は、

200人近い小学生、中学生がこの夏アメリカに行きます。これはアメリカの政府直轄青少年教育機関である4-H国際委員会という団体でしてね、そこ交流をしているんです。日本の文部省に話はあったけれどもお受けにならなかったので、私どものユートレックにその話が来たんです。それではそれでやろうということになりましたもう20年になります。9・11事件があったので人数は減りましたが、そのころは300人くらいの子どもたち、子どもたちといっても小学生、中学生、高校生、大学生、全部行っておりまして。私も話をしにいきます。

私が一つ思うことは、文化の違いですね。だからですね、文化と言うのは生活ですから、

【中嶋】貴重なご意見ありがとうございます。私も二つの論点に大賛成です。

特に社会教育については、文部科学省はどうも自分のところで作って、自分のところで免許を与えたものしか、子どもは英語に触れさせちゃいけないみたいな公教育に対する過信がありますよね。ところが先生のところの青山は、昔から英語教育を含めて初等教育はユニークですし、そういう民間部門にもうちよって教育を任せるっていう発想をしないと、だめですよ。ありがとうございます。是非活かしたいと思います。

【佐々木欽三】(元NHKプロデューサー)

素朴な質問なんですが、確かに今の英語教

生活はそこで言葉として英語を使うのは当たり前です。それで私どものやっておりますのは、英語教育ではないんですね。英語の学校に行くんじゃないんです。それぞれの家庭に入っていく。これは責任を持って、あちらで一对一で、しかも複数で行かない、一人の子どもがひとつの家庭に入るのです。そこで約一月、一緒に生活します。それで帰ってくる、こういうことをやっています。

文部科学省がこれをおやりになるというのは、10年かかると思います。10年かかってできないと思います、たぶん。それよりも文化から入っていくというのは、子どもたちとしては非常にいいんじゃないかと思います。

育は100年を越える実績があるんですけど、話せない、聞けない、ヒアリングできない、言うべきことを言えないという、非常に国際的についていけない状態にあることは真実で、これを変えなければならぬことはよくわかります。国語も必要だと言う、これも絶対必要です。

ただなぜそういう英語教育しかなかったのかということです。100年も経っているんですね。読み書きだけで、英・数・国・漢といわれてすごく重要視されながら、ヒアリングもできないとか、しゃべれない英語教育をしてきたのかということ、その総括がされているのかと疑問視しています。そこがポイントであれば、英語教育をするにあた

って、そこを変えるべきで、小学校からやれば、そこが解決するっていう問題ではないんじゃないかと思うんです。そこを変えながら小学校から英語をやる、そちらのほうの問題提起が必要ではないかと思います。一説によると、そういうところを教える先生がいないんだという話も聞くんですがね。その辺の議論はあるんでしょうか？

【中嶋】我々も英語教育指導方法の改善に関する報告をまとめたのですが、それはかなり今言ったようなことを意識して書いたつもりです。ただご指摘のように、なぜそうなったのかというような学說的なところはまだ弱いんですね。小学校は別にして、中・高・大と一貫した英語教育のシステムが必要ない。

文科省は本気なのでしょいか。変えつつあることが皆に分かれれば、その上で小学校での英語教育の話へと進むのでしょうか。

【中嶋】それはかなり文科省は本気でやりつつあるんです。まだ若干僕から見ると腰の引けてるところがあり、いろいろなことを考慮しすぎているところはあります。

【笠置正民】（㈱格付投資情報センター国際担当）笠置と申しますが、日本をベースにした格付け会社に勤めております。3年前まで日経にいました。

お話を伺って思ったのは、必要に迫られるということが、英語にとってはすごく必要かなという事です。と申しますのは、私は一

んですが、その連携も取れていないんですね。中学は中学、高校は高校、大学へは受験、受験で、大学の受験のときで終わりですからね。後は英文学関係とか、東京外大みたいなところに行かない限り、ほとんどそこで中断されちゃうんですね。そういう問題があります。連続性と一貫性ということを非常に強調してレポートを作っていますので、徐々に実践的にはそっちのほうに行くんでしょいけれど、ご指摘にあるようなことを各論的に追及するのは、していないんですね。

【佐々木】それを総括することが必ずしも必要と言うわけではなくて、現実それがいま一番欠けているのであれば、今の英語教育を直ちに変わすることをまず考えなければなら

CUという大学を出てまして、日本では一番恵まれた英語教育を受けたと思うんですが、つい最近までは何か英語というものはいいい加減に思っていたんですね。

ご承知のように、格付けの業界と言うのは、スタンダード&プアーズというのが世界的にはジャイアントで、日本には二社あるんですけれど、そういうものがあるということを、あまり認知すらされていない。米系の格付け会社も相当攻勢が激しくてですね、これはうかうかしていると、やっぱり十年後うちの会社があるかどうかかわからない、そういう環境になっております。日本にあっても円債の信用評価については一番メジャーな会社だということ、勝ち抜いていくためには、日本

にも外資系の証券会社たくさんありますし、やっぱり海外にうちの会社があるってことを認知してもらわないと生き残っていけないですね。

そういうことで先ほどのお話のように、セミナーであまりいい加減なことを言ってる人がいるのであれば、これは止むに止まれず手を挙げて質問するとかですね、下手な英語ですけれども、そういうことをやらざるを得ない状況に追い込まれますし、いろいろ海外でも当局に認定を取りたいとかいうと、必死にEメールの文章を作っております。最近ですが、自分で言うのも変ですけども、やっぱり言いたいことが素直に書けるようになったなど、56歳で大学を出てかれこれ40年

てもやっぱり苦勞します。九つまでに、ヒアリングの教育を受けていれば良かったなあと思います。ですから、そこは何かやる必要があると思いますが、やっぱり日本人のトータルの英語の潜在能力といったものを生かしていくことが、肝要ではないかと考えています。

【松平恒忠】(日本フィンランド文化友好協会)

松平と申します。日本フィンランド文化友好協会というのをやっておりまして、そのほかに北村さんも役員をやっておられる、英語交流連盟という英語を広げるボランティア運動をやっております。

フィンランドのことについてちょっと申し上げたいんですが、フィンランドという国

近くなりますが、ようやく出来てきたなど。それは何だろう、今までも英語使う機会いろいろあったんですが、やっぱり生存を脅かされるという、ちょっとオーバーなんですけれど、そういう状況になればできるんですね。

さっきのお話で言えば、ほとんど無駄な英語教育という風におっしゃってましたけれど、これから中国も台頭してきますので、うかうかしていると、日本が経済大国だという時代ではなくなって来ます。やっぱり多くの分野で、止むに止まれず英語は使われる局面が出てくるのではないかと思います。そういう意味ではもちろん教育は大事ですし、お話の中でやっぱり一番そうだなと思うのは、私の中ではヒヤリングなんです。どこまでいっ

は非常に国際的にも評判になってきていて、国際競争力が高い国なんです。最近発表されていますが、何年も続けて教育がNO1なんです。

それで英語連盟にフィンランド大使館の参事官を呼んで来てレクチャーをしてもらったんですが、びっくり致したのは、フィンランドでは小学校1年生のときからフィンランド語と、それからスウェーデン語というのを全員にマスト(必須)で教えるんですね。スウェーデン語とフィンランド語というのは、講師に言わせますと、日本語と英語くらいぜんぜん違う。それを、つまり700年間くらいフィンランドはスウェーデンの属国だったわけですから、いろんな文化があって、

全体のインフラがスウェーデン語がないと上手くないことから、子どものときから二つやる。なおかつ小学校3年生から第3外国語を選択で教える。その第3外国語は、最近ではほとんどが英語だというわけです。

したがって彼女は、子どもってというのは、バイリンガルの能力を完全に持っていると言います。で、自国語というのは文化そのものですから、外国語ではない、国語というのは自分自身ですね。その他の外国語は、いつ教えたって絶対に大丈夫ですよとも申します。日本人の皆さんが非常に英語のことを議論なさっていますけど、やってごらんない、大丈夫ですよって言うんです。

で、それには前提がありまして、先生の質の導入の仕方が問題ではないかと思えます。今井さんがおっしゃったように、「沈黙は金なり」とか、「葉隠れ武士」とか、日本武士道の精神の中に、「男は黙って勝負する」美意識がございます。日本精神の旺盛な人ほどその傾向が強いようです。その上、文化人類学者のルース・ベネディクトによれば、日本人は「恥の文化」の型に入りますから、ジャーナリストでも、作家でも学者でも、きちんと論説でも論文でも、あるいは豊かな日本語を駆使して小説などを書く方は、おおむね無口で静かで、それでいて信念をもっている人が多く、公衆の面前で発言することを嫌います。そんな方からみれば英語でぺらぺらと話すことが出来る人ほど、軽薄に見られがちで

なんです。彼女も言っておりましたが、フィンランドは教育でNO1だというのは、教師は少なくとも全員修士、それで非常に高く社会的に遇されておりまして、尊敬もされております。やる気もうんとあって、言うなれば理想的な先生ばかりだということなんです。そういう環境の中でやれば、子どもに外国語を教えることはそんなに難しいことではないということです。こういう例があることを、ここで申し上げさせていただきます。

【中嶋】大変参考になります。

【浅沼(小谷)】皆様からの貴重なご意見を感慨深くお聞きいたしました。伊藤朗先生がご指摘なさった「日本文化の型」への、英語

す。

日本語は仏教、儒教の漢文から学問を学びましたので、江戸時代では論語など四書五経が武士の子弟の必須の学問でした。同時に「門前の小僧、習わずとも経を読む」と、寺子屋では「読み書きそろばん」もさかんでした。

明治時代の文明開化の時代になりますと、欧米人が話す言葉と一緒に、キリスト教文化や西洋音楽が入ってきました。「目から入る文化」と「耳から入る文化」が時代潮流とともに重層に交差しております。森鷗外や夏目漱石の時代は、ドイツ語や英語は、大学で雇いの外人教師や教会の牧師夫妻から直接習いました。森鷗外は官費でドイツに留学し

ましたとき、日本で習ったドイツ語が果たして、ドイツで通用するかどうか非常に心配したそうですが、ドイツ駐在の青木大使よりドイツ語がうまくて、大使が日本文化について話さなければならぬときは、鵡外がいつも替わってスピーチをしたというエピソードがございます。

夏目漱石にしても、文部省からイギリス留学を命ぜられたとき、旧制高等学校の英語の教師をしていましたが、彼はイギリスに行って、自分の意見を自由に話すことが出来るかと、非常に心配しまして、オックスフォード大学やケンブリッジ大学で学位をとることはやめて、プライベートなチューターの教師につきまして、興味の湧く文学者の本を買っ

といわれるこの時代。日本は国家戦略として、いまや世界語となった英語を駆使して活躍できる国際人を作るために、中嶋先生が設立なさった国際教養大学は、低迷する日本の大学の国際水準を高める突破口となるでしょう。お忙しいところを本当にありがとうございます。ありがとうございました。(了)

て徹底的に勉強するのです。彼の下宿の部屋は積み上げた書籍で埋まっていて、引越しも出来なかったそうです。漱石はうつ状態になって「漱石 狂へり」と文部省に電報が打たれたほどです。鵡外も漱石も日本に帰国してから、留学体験から学んだ思想を駆使して、明治時代を代表するすばらしい文学者になりました。昭和の15年戦争の時代は、欧米の敵国語を徹底的に排除する攘夷時代でした。そして迎えた敗戦。英語やアメリカ語に對しては、愛憎からむコンプレックスがありましたので、日本人の英語での会話能力は世界でも低い水準です。21世紀のITによる高度情報化によって、人間も学問も経済も、国境や民族を越えて交流する、第三の国際化

講師略歴

1936年、長野県松本市生まれ。文学士（東京外語大学中国科V、1960年）
国際学修士（東京大学、1965年）、社会学博士（東京大学、1980年）
1977年、東京外国語大学教授
1995～2001年、東京外国語大学長
1998～2001年、国立大学協会副会長
1998～2006年、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長
現在は文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部会主査）
オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授を歴任。
平成15年度「正論大賞」受賞

著書

『現代中国論』『中ソ対立と現代』
『北京烈烈』（サントリー学芸賞受賞）
『中国の悲劇』『国際関係論』『中国・台湾・香港』『「日中友好」という幻想』『21世紀の大学』など多数。

（この項は第六回セミナーの内容を主宰者側の責任で整理したものです。）

経営国際化とパフォーマンスの関係性

小林 規 威

慶應義塾大学名誉教授
多国籍企業研究会名誉会長

第二次世界大戦後、数多くの国際経営管理に関する貴重な理論、モデル、仮説が誕生した。プロダクト・ライフ・サイクルや内部化

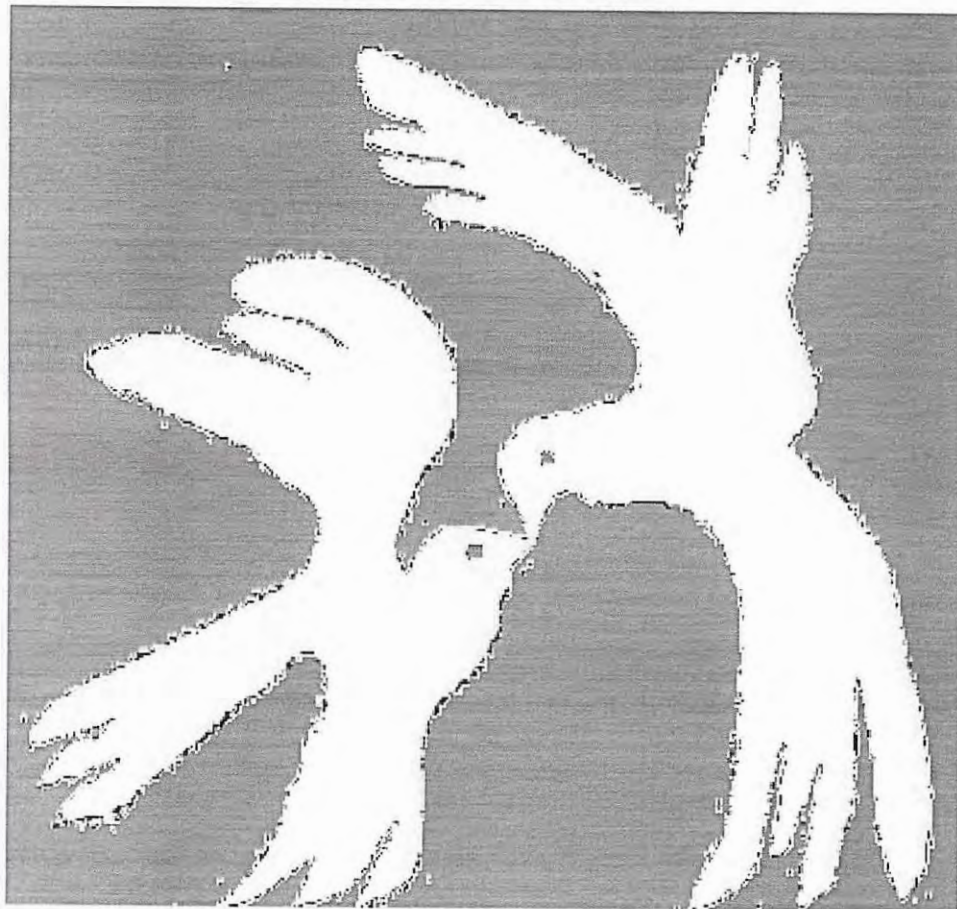
を越えグローバルな経営を展開するのに役立ってきた。

の理論、グローバルで統合された三次元ネットワーク組織モデル、国の競争モデル、そしてエクレティック仮説など枚挙にいとまがない。いずれも大変有益であり、企業が国境

しかし、そこでは、一つの重要な問題が完全には解明されず残されていた。それは、国際化の進捗度と経営のパフォーマンス（及び成果）との関係性のモデルの構築である。確かに、これまでの理論やモデルは、

ESPOIR

2006年 爽秋号



EAST & WEST

定価 500円